http://decfamily.p1.bindsite.jp/2016/

We 13R

No.038　16/06/07

主役は君たち、高校生

先月22日（日）の東京新聞社説は、君たち高校生に語りかけるものになっていた。タイトルは「主役は君たち、高校生」。

＊

夏の参院選では十八歳選挙権が実現します。高校生の政治活動制限も条件つきながら緩和されました。自ら問いを立て、社会へ思いをぶつける好機です。

・福島県立福島高校

「現在の高校は人格形成の場ではなく、大学受験のベルトコンベヤーと化しており人間不在の教育と化している」＝一九六八年送辞

・私立麻布高校

「受験体制の中で羊のごとく飼いならされ、反抗することを忘れていた私たちも、主体性を取り戻そうとする第一歩を踏み出す」＝六九年答辞

◆今に通じる問題意識

・広島県立呉宮原高校

「戦争に向かって着々と進む軍備の拡充、教育の反動化、生徒の人間性を認めない学校や社会に対し、我々は強い反抗心を抱いている」＝六九年送辞

・岐阜県立多治見北高校

「先生たちの中にはポスターを検閲したり、ビラ配布を拒否したり、生徒会活動に首を突っ込む、かちかち人間がいた。監視された生活より、人間らしく生きる生活がほしかった」＝七〇年答辞

東大安田講堂事件に象徴される大学紛争は六〇年代から七〇年代初めにかけて、全国各地の高校にまで広がった。その時代の卒業式で、生徒たちが述べた送答辞からの抜粋です。（小林哲夫著『高校紛争１９６９－１９７０』）

政治や学校教育の在り方について、生徒たちは自ら問いを立てました。今でも通じる問題意識が読み取れるのではないでしょうか。

そうした考えや価値観は、頭髪や制服制帽の自由化、定期試験廃止、学費値上げ阻止といった身近な要求へと転じます。さらにはベトナム戦争反対、沖縄奪還、日米安全保障体制粉砕のようなグローバル規模の要求へと高まった。

◆管理優先の行政体質

だが、一部は表現方法を誤ります。授業妨害や校長室占拠、バリケードで学校を封鎖したり、機動隊と衝突して火炎瓶を投げたり。暴力や破壊に走ってしまった。

翻って、今はどうでしょう。

安保法案にあらがった昨年の国会前デモ。自由の森学園高校（埼玉）から参加した有志たちは歌を熱唱しました。例えば、ミュージカル「レ・ミゼラブル」の劇中歌「民衆の歌」。自由で平等な社会への願いを込めて。

新聞を読み比べて学んだという二年生の田上凪（なぎ）さん（16）は「平和を求めるんだから、怒りをぶつけるんじゃなく平和的にやりたい。大切なのは、僕たち一人一人が意見を持ち、発信すること」。ネット世代の感性がにじみます。

生徒たちの過激化を抑え込もうと、文部省は六九年に、校内外を問わず政治活動を一律に禁止しました。憲法で保障された集会や結社、表現の自由、良心や思想の自由を傷つけてまで、現実政治から高校生を遠ざけてしまった。

（次号に続く）